

新刊紹介

狩野春一監修

コンクリート技術事典

本書は、コンクリートに関する事項・用語を50音別に配列して、それぞれに具体的な解説を加えた辞典形式のコンクリート技術書である。その内容は、およそコンクリートに関連する材料、施工、構造について約4000項目にわたって集録しており、たとえば材料については、コンクリートおよびその成分材料はもちろんのこと、コンクリート二次製品、鋼材、アスファルト、合成樹脂、合板、タイル等に至るまで、それぞれの沿革、製造、性質、試験方法、規格等について、数多くの図表、写真、引用文献を付して詳細に解説している。本書は、コンクリート工学に関連する統計学、レオロジー、物理学等の基本的用語をも丹念に集録しており、さらにコンクリートに関連する国際的な学会、会議等の略称に至るまでとりあげ、解説している点は、誠にゆきとどいた編集といえよう。

本書に類する書物としては、戦前に出版され、すでに5版(1950年)を重ねている Kleinlogel の「Einfhüse auf Beton」があり、昭和12年に浜田 稔によって、「コンクリート総覧」として邦訳刊行されたことがある。主にコンクリートにおよぼす物理的・化学的諸要因の影響を作用項目ごとに解説し、これをアルファベット

順にならべたもので、多くの成書や研究論文をあさる手間をはぶき、所要の事項を迅速に把握できる点で、多くのコンクリート技術者にとって益するところ大であった。監修者は序文において、「本書もその長所にならい、内容をわが国今日のコンクリートに即して新しく、かつさらに広くと心掛けた……」と述べているが、その意図は本書においてほぼ貫かれたものと考えられる。

本書の執筆者は約90名の多数におよび、そのほとんどが建築関係の研究者によって構成されており、土木関係のメンバーは数名に過ぎない。このためにとりあげられている事項・用語の選定およびその解説は、やや建築に重点が置かれている傾向がみられるのは、やむをえないことであろう。たとえば、配合設計に関する事項、型わくの存置期間等の解説は、日本建築学会の方法が主体となっており、事項・用語の選定に関しても注入工法や橋梁、トンネル、河海構造物等の施工に関してはあまりとりあげられていない。しかし、コンクリート技術を本書のような形式にまとめた書物は、上述の Kleinlogel の著書を除いては、内外ともに初めてのことであり、コンクリート技術者が座右において、大変役に立つ書物であるといえる。

なお巻末には、セメントコンクリートに関する内外の主要な研究機関、雑誌名と日本工業規格が集約されており、読者の便を図っている。

[K]

オーム社刊、B5判・908ページ、定価8000円

飯吉精一編集

建設業の 昔を語る

徳川三百年の鎖国令がとかれ、西欧にならった近代国家建設へと踏み出したわが国にとって、鉄道、港湾、水力発電等々の施設建設、そして都市・建築建設は必然の事業であった。この間わが国においては富国強兵を国策とする政策からくる諸々の事情によりこれらの事業の発注者は国そのものがそのほとんどを占め、その建設史は識されていった。そして土木の場合旧幕時代の夫役——大名の命により人夫を集め小さな土木工事に当たっていたもの——が、維新後請負となり今日の建設業に連なる発展の過程を中心に、建設業の側面をとらえたのが本書である。内容としては、古老は語る(日本の土木建築を語る、大阪の土木建築界を回顧して、建設業の五十年)、古書は語る(「日本鉄道請負史」が語ってくれること、「土木工業協会沿革史」は何を物語るか)、年表は語る(本邦土木建築年表)、解説(建設業団体の変転、鉄道工事施工方式の発展、建設業の封建性の一断面、明治以降年表)の4編からなっているが、特に最初の「古老は語る」は注目に値する記録であろう。今日上場されている大建設会社群の生い立ちを、創成期の指導者が語る座談会記事は、業界の盛衰を物語る興味深く、建設史の年表を読むがごときスリルさえ覚える。歴史の浅い業界にあってその先駆者が労苦の中で語った将来への展望の中には、今日の時点でもなお新鮮な考えかたを提供してやまないものがある。また残る3編も、おのおの注目に値する。今日の社会経済に占める建設業の比率には大なるものがあるが、この事業体の負わされた社会的な責務を全うするためにも、関係者特に建設業に身を置く多くの人に読んでいただきたい好著である。先頃土木工業協会と電力建設業協会の手で刊行された「日本土木建設業史年表」が刊行され好評を博したが、今日に致ってようやくにして、この種の書物がひのめをみひることになったことをよろこびたい。

[か]

技報堂刊、A5判・450ページ、定価1500円